

巻頭のあいさつ

全国臨床糖尿病医会 過去80回の例会抄録を振り返る

船山内科
船山 秀昭 先生

1. 黎明期(会長:故守屋美喜雄医師)

●機は熟した「糖尿病を本音で語る会」

本会は1985年4月に守屋美喜雄医師が中心となり「全国糖尿病診療開業医の集い(1986年の3回目から全国臨床糖尿病医会(全臨糖)に改称)」として立ち上げられた。筆者は初回の抄録集から第80回に至るまですべてを保存しているが、数回までのアンケート調査用紙は手書きであり、それ故に当時の意気込みが伝わってくる。因みに第1回の本会は東京の八重洲富士屋ホテルで開催され、出席者は北海道から九州に至るまでの19名であった。都内の1開業医である守屋医師がこのような全国規模の糖尿病診療を主体とする医師にお声掛けできたのは、某メーカー主催による泊りがけで行う「糖尿病教育担当者セミナー」に参加されていたことが原点と推測している。1984年の本セミナーで数名の有志から「開業医における糖尿病についての問題点や悩みを出し合う本音で語る会を立ち上げよう」との機運が高まりその翌年に上記の如く第1回の会が開催されている。

●守屋美喜雄医師との出会い

ところで守屋医師は先に1980年に実地医家における糖尿病診療の向上を目的とした「東京臨床糖尿病医会(東臨糖)」を立ち上げておられていた。筆者は当時大学病院で糖尿病の診察を担当していたが「DITN」の案内をきっかけに参加したところ、研究センターの大学と違い正にこの医会こそが臨床糖尿病の原点と悟り、その後年4回開催される会に定期的に出席し後にまとめ役も仰せつかった次第である。なお、守屋医師のご遺志により東臨糖の継続と発展のため多額の志を戴き、卓越した報告・発表に対して「守屋美喜雄賞」が授与されていることを付記しておく。このように糖尿病診療に対する並々ならぬ熱意が感じられたことから、凡医である筆者は1985年10月の本例会第2回から参加させて戴き、先日(2023年)の例会が81回であったことから少なくとも75回は参加したことになる。この二つの会に共通していることは、お互いに抱えている問題点や悩みを率直に打ち明けあい膝を交えて議論し、明日の糖尿病診療への活力とすることである。とくに全臨糖は春秋年2回、1泊2日の合宿形式であり、一つの疾患に対する全国規模の集会として当時では極めてユニークな存在であり、現在においてもこのような会は筆者の知る限り見聞していない。また開業医故に経営も重要な要素であり、会員条件として日本糖尿病学会会員である開業医

または病院を開設、経営する医師と限定されている。本会は全国規模であるために2つの特色があり、一つは以前より保険審査基準が都道府県により異なることが指摘されているが、全国規模であることからその相違を即座に知れ、もう一つは転勤などに伴う患者さんの紹介に際して「顔の見える医療」が実践されていることである。当然のことながら学習意欲や向上心の高さから医業環境は厳しいものの交通費、宿泊費などは厭わない。

●初期抄録集からの印象的な話題

- ・100万人といわれていた糖尿病患者数は今やなんと250万人程度と。
- ・大学病院医師のみが糖尿病専門医(Diabetologist)と称され、全臨糖会員のように糖尿病中心に診ている医師は「準専門医」と。
- ・糖尿病は「Stigma」扱いされており、若い女性が感冒などで地方の開業糖尿病専門医を受診すると「お嫁にいけない」との噂が立ったと。
- ・SU薬の力価についてのテーマが多く、巷ではダオニール(2.5)4Tも少なからずと。
- ・インスリン治療患者に対し、開口一番「今現在、ブドウ糖を持参していますか?」と問う医師の発言に一同納得と。

2. 成長期(会長:故池田正毅医師、土井邦紘医師、伊藤眞一医師、杉本英克医師)

- ・第43回(2004年):装丁刷新
- ・第54回(2011年):CDのちにDVD
- ・第59回(2014年):Practice投稿
- ・第71回(2021年):Web開催
- ・第75回(2023年):Hybrid開催

3. 成熟期(会長:内田大学医師)

- ・第79回(2025年):全国臨床糖尿病医会学術雑誌の創刊(第1巻、第1号)

4. 当会員は「真の臨床糖尿病医」

本会は糖尿病について徹底的に語り合う40年以上連続と続く会で、特異な開催形式から糖尿病診療に熱意のある医師のみが継続可能であり、最近10年間の会員数は130~140名と安定している。以上より当会員はペーパー上の日本糖尿病学会や日本専門医機構による糖尿病専門医とは異なり、重みと深みのある真の臨床糖尿病医である。